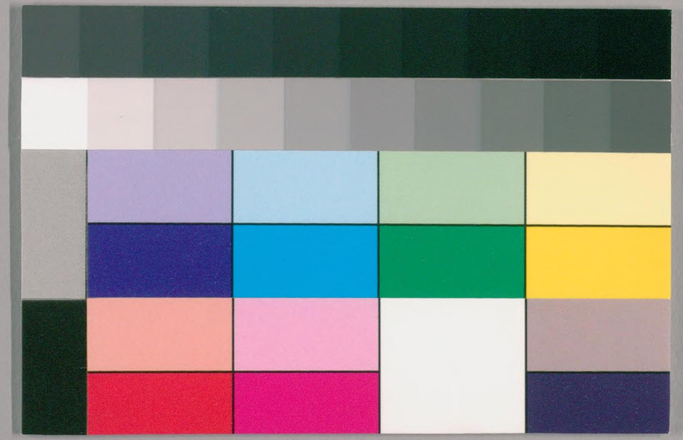
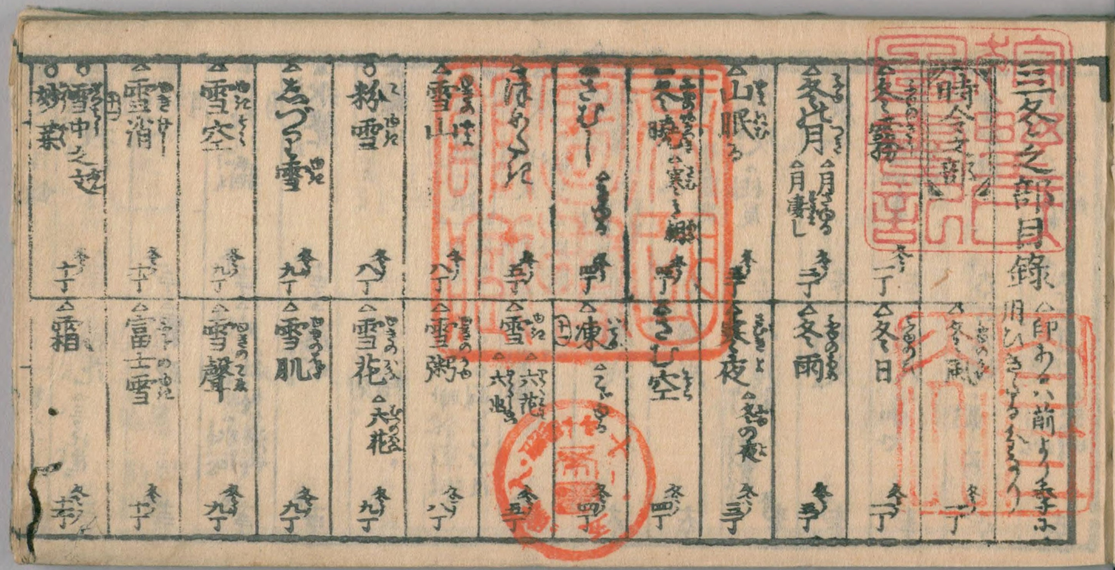


国立国会図書館　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961

ガラス使用



三冬之部目録

△印あるハ前より季に用ひきたるなるべし

時令之部

△冬霧 冬一丁
△冬日 冬一丁
△冬月 △月寒し 冬二丁
△冬雨 冬三丁
△山眠る 冬三丁
△寒夜 △冬の夜 冬三丁
△冬曉 △寒き朝 冬四丁
△さむ空 冬四丁
△さむし 冬四丁
△凍 冬四丁
△はめくれ 冬五丁
△雪 △六花 △六出 冬五丁
△雪山 冬八丁
△雪粥 冬八丁
○粉雪 冬八丁
△雪花 △六花 冬九丁
△たづつ雪 冬九丁
△雪肌 冬九丁
△雪空 冬九丁
△雪聲 冬九丁
△雪消 冬十丁
△富士雪 冬十丁
○雪中之迹 ○妙葉 冬十丁
△霜 冬十丁

特1
2961

国立国会図書館　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961

ガラス使用

△霜柱 冬十二丁
△霜花 △三比花 冬十二丁
△霜氷 冬十二丁
△霜夜 冬十二丁
△はたし霜 冬十三丁
△氷 △厚氷 △氷花 △氷衣 △薄氷 冬十三丁
△氷聲 冬十四丁
△露氷 冬十四丁
△鐘氷 冬十四丁
△氷の轄 冬十四丁

冬混雜之部

此部ニハ月令時令草木などにかゝりしる品をいづれ

△炭 △切炭 △池田炭 △炭頭 △輪炭 △炭圓 冬十五丁
△炭竈 △炭燒 △小野炭 冬十五丁
△獸炭 冬十六丁
△榾 △骨薫炭 冬十六丁
△廻炭 冬十六丁
△白炭 △枝炭 冬十六丁
△賣炭翁 △炭賣人 冬十七丁
△炭斗 冬十七丁
△助炭 冬十七丁
△炉 △圍炉裏 △地炉 冬十七丁
△埋火 △炉火 冬十七丁
△塗炉緣 冬十八丁
△火燵 △置こたつ 冬十八丁
△火桶 △桐火桶 △火鉢 冬十八丁
△手炉 △懷炉 △手焙 冬十八丁
△湯婆 冬十八丁
△蒲團 冬十八丁
△衾 △蚊衾 △小衾 △厚衾 △麻衾 △ちさ小衾 △鴛鴦衾 △ふすき衾 △まけの小衾 冬十八丁
△紙衣 △紙衣ふすゝ △かしこ羽織 冬十八丁
△頭巾 △頭巾 △角頭巾 冬十八丁
△綿 △綿打 △綿操 △延綿 △唐綿 冬十九丁
△足袋 冬十九丁
△束綿 △綿摘 △臀綿 冬十九丁
△綿帽子 冬十九丁
△綿衣 冬十九丁
△水洟 冬十九丁
△胼 冬十九丁
△皸 冬十九丁
△寒瘡 △妙菜 冬十九丁

冬艸木之部

△薪 冬十九丁
△胡蘿蔔引 冬十九丁
△葱 △冬葱 △ぶぶ 冬十九丁
△枯野 冬十九丁
△朽野 冬十九丁
△冬木立 冬十九丁
△寒草 冬の草 冬十九丁

冬生類之部

△鷹 △兄鷹 △弟鷹 △雀鷂 △雀鷹 冬十九丁
△鶴舊 △鶴鷹 △隼 △兄鶴 △角鷹 △鶴 △鵰 △鴟鳥 冬十九丁

国立国会図書館　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961
ガラス使用

△大鷹狩 △鷹野 △鷹狩 冬 廿三丁
△追鳥狩 廿三丁
△狩場雉 冬 廿三丁
△鳥の落草 冬 廿三丁
△力草 冬 廿三丁
△教草 冬 廿四丁
△ぬすん立 △ぬすと立鳥 冬 廿四丁
△鳥立慕 冬 廿四丁
△鷹匠 冬 廿四丁
△列率繩 冬 廿四丁
△鳥叫 冬 廿四丁
△鷹犬 △狩杖 冬 廿四丁
△千鳥 △川千鳥 △刺千鳥 △小夜千鳥 △えハ千鳥 △浦千鳥 △濱千鳥 △島千鳥 △友千鳥
△友ヒ千鳥 △もゝ千鳥 △夕千鳥 △わもちどり 冬 廿五丁
△鴛鴦 冬 廿五丁
△鴛の衾 冬 廿五丁
△鴛の沓 冬 廿五丁
△鳧 △真鳥 △小鳧 △黒鴨 △ちゞ鴨 △羽白 冬 廿五丁
△ゆきて △こきかも △沉見 △ゆちむら △ゆちの奈鳥
△水鳥 冬 廿六丁
△浮寐鳥 冬 廿六丁
△鳩 冬 廿六丁
△木兎 冬 廿六丁
△鱈 塩鱈 冬 廿六丁
△雲腸 冬 廿六丁
△蛎 冬 廿六丁
△蛎舟 冬 廿六丁
△鯨 △鯨突 △鯨舟 冬 廿六丁
△水魚 △水魚使 冬 廿七丁
△鯽 冬 廿七丁
△網代 △網代木 △網代人 △おしろ守 冬 廿七丁
△夜奥引 冬 廿七丁
△柴漬 冬 廿七丁
△竹筍 △筌 冬 廿七丁
△潤眼 冬 廿七丁
△河豚 △ふぐ汁 冬 廿七丁
△生海鼠 △海鼠 △金海鼠 冬 廿七丁
△海鼠腸 冬 廿七丁
○鮪 ○初の鮪 冬 廿七丁

必用之部

此部は冬の天氣こゝらなひ其外養生等をのせ

△飲食之部
△切干 冬 廿七丁
△莖漬 △莖菜 冬 廿七丁
△生薑酒 冬 廿七丁
△雞卵酒 冬 廿七丁
△鍋燒 冬 廿七丁
△杉燒 冬 廿七丁
△風呂吹 △大根蒸ぢつぎ 冬 廿七丁
△納豆汁 冬 廿七丁
△柚味噌 冬 廿七丁
△蕎麦湯 △そば粥 冬 廿七丁
○料理献立 冬 廿七丁

国立国会図書館　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961
ガラス使用

○此書の本文をいろは[illegible]月令以呂波分惣目録と題号を名づけ別に賣出しかれ季節に用ゆるものハ勿論季節に用ひきたらぬ物にても俳狂の便りとなる事又ハ月華艸木魚鳥の異名和名古名ハ聲にしたがひてハ[illegible]いろは分に出る。本書に注解のことがかしたりの又ハ出所の落たる物ハ此目録の條下に辨明を本書に二處三処にあらんとき委き訳ハ何れにあるはなりかたき物此目録にて見るし

をの部 沖津鳥 冬ノ[illegible] この部 △恋[illegible]鳥 [illegible]

あの部 △秋湊 九ノ北丁ノ訳 春の湊の所とされ 春湊に出 湊のまけ[illegible]

みの部 △水無月 六ノ[illegible] 万葉出 水無月の出處万葉集を本文にとらざる故此処にのせ

余を准して知るべし其外狂・俳・詩・哥の便りとなる事多く載る故此目録をかりにても會席などに懐中しく失忘に備ふべし

三冬之部

冬の異名和名冬の神等を十月の初口にしるす

時令

此部にハ冬三ケ月の時候にかゝわる事をしるす

△冬風

哥にいはしをもてかしをも讀又音寒く吹きまふよしを云

占考 冬南風吹ハ三日が間霜多し寅卯の日風なれハ其月ハ風多し

哥 我やとの梢のまゝにかゝしけり山のはしをもひてつやき 式部

[illegible]

俳 [illegible]の風[illegible]も皆おそせ野明[illegible]の風 蓮二

詩 冬風五字對句 同上

黑帝行威肅 雲岳千岩瘦

冬ヲツカサトル神ノイセイガオソロシイ 雲ノカヽツタタケモ風ガフケバ岩ガヤセテミエル

飛廉意氣雄 霜林萬葉飛

カゼヲツカサトル神ノ心イキモスサマジノ シモノフル林モハガヲフケバアセタ木ノ[illegible]

国立国会図書館 タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961
ガラス使用

三冬 時令 冬ノ

詩 冬風 鮑[illegible]道

出自薊北行疾風衝塞起

薊北トイフ所ヲ出テユケバハゲシイ風ガ陣ゴヤヲフキタヲスヤウニオコリテキタ

沙礫自飛揚牛馬縮如蝟

スナモコイシモミナヒトリデニトビアガルユヘ牛モ馬モスクンデ子ヅミホドニナツテミエル

冬霧 秋の霧ほどにふかくはなれど冬のきりはとかく水ぎはにふかし

哥 こちらこちらてわたる瀬もなくぬされ川にしらくやおものよるる成らん 基俊

あらし山ふもとをくらる川きりの雲にまかりもくるの明日の 為家

詞 鶴わらけ。千ゑ遠ふ。たえくさむき

俳 雲より外ふるへ見れしは水の雲 二水

狂 鶴ぎりは日は鶴ようも因代なるまでしハ飛もかくとなり 和水

冬日 黒道とて北のうたをもくありよ川ぐ日をしらし

哥 ほとゝなれてやのあしかれひまへて 朱世

詞 ほどなきちげ。めづらほどなき。よいれ日かげ。さむき日うげ。ほかりつろふ

俳 冬の日や人は身の械はかり 許六

冬の日や物かと思ふ故のあゆミ 湖春

狂 日ふかくあしこのあれの鶴しきはるよろこんでゆくまりかくて 鶏明

詩 冬日五字對句 同上

忽忽短晝光 漸過三竿外

セハシクシテヒルノカゲ カミジカク ゼンく二三竿ホト バカリノボル

融融浮和氣 初添一線長

ノトカニシテアタヽカナ ヲシヒヒ ウカブ ユノコロハジメテ女ノヌヒハリノ糸一スヂホト長フナル

詩 冬日詞 白居易

杲杲冬日出照我屋南隅

トシタハ冬ノ日ガ出テコチノ家ノ南ノスミラテラス

負暄背日

坐和風入肌膚

ヒナタボコヲシテ日ニウシロムイヘノフクルヽ

国立国会図書館 タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961

ガラス使用

三冬 昨今 冬ノ二

ノドカテ風ガハダ
ヘニトホルヤウナ
初似飲醇醪又
如蟄者蘇
ハジメノホドハヨイサケヲ呑
ヤウニアツタガノチニハウゴ
ノイテ井タモノガイキ
カヘツタヤウニナツタ
外融百骸暢中
適一念無
カラダノソトハコヽロヨウユルンデカ
ラタヂウガノビルヤウナリ心ノウチハ
ヤスラカデナニ
モ思フコガナイ
曠然忘所在心與空虛
俱
何トナク心カヒロヾトシテカウシテ井ルコトモ
ワスレテコヽロハ虛空トオナジヤウニナツタ

冬日故事
唐宮中ノ女ノヌヒ針ノロザヲ以テ日ノ長ミジカヲコヽロミハカルニ
冬至ノ後ハ一日ニ糸一スヂツヽ多クヌハルヽト云リ 唐雜錄二出

冬の月
△月さゆる △月をさまし
枕草帋に老のけをひに
たとへていとをごれものなり
さゆるハ澄きよれの甚しきなり

哥 拾遺集 友輔
あしのおれ此の水乃さやけさを
月のひかりのしかくなりけり

千載 平實重

夫木 大納言經信
名にしおくよかりそてぬる風なる
むへこそ月をくしかりけれ

續古今 家隆
なかめつゝいく夜袖にくもるらん
時雨にふくる有明の月

詞 氷にやとる。このそれにある。梢くまなれ。雪にかゝふく。このまさからぬ。
みかれ芝の末葉。雪にしたり紙にする。
氷にもさからぬかけ。雪にもおおく。

俳 襟巻のお洋ア下ゝ冬の月 蒲丈
冬月やつきなきこうけも松ハ松 其角

狂 こうかいとまくやそのやうれる敷ないや
老のけをひぞまさるを月 貞左

冬の雨
冬の雨をこはるにしてく
多くハ雪にまじりけるなり

哥 ふるあの雪にまうけ冬の雲
風やそに吹こほるらん 為家

国立国会図書館　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961
ガラス使用

その里まことにかきくりかゝるに
外山をこれはまるそつかれる　衣笠

俳　その夜まゝまにある板やゝ　羅人
簾のまもいれてさひしきその雨　加十

狂　たゞさへも山ハ孫ゝまりそのあ
ゝられまゝにたゞおこせと　信穂

△山眠　冬の山の姿をいふ。四季の山乃
姿をいへる詩あり次にしるす

詩　四季山之詞　卧遊録ニ出

春山淡冶而如笑　春ノ山ハアツサリトシテ人ノエメルヤウナ
夏山蒼翠而如滴　夏ノ山ハアラクトシテウルホフヤウナ
秋山明淨而如粧　秋ノ山ハサツパリトシテカザリタルヤウナ
冬山慘淡而如眠　冬ノ山ハモノサビシウテシヅヽツタコヽロナリ

右の詩の心を以て季に春ハ山笑ふ
秋ハ山粧　冬ハ山眠ると三ツ出して夏の
山滴を季に用ひざるも俳の掟ゝ

△寒夜　△冬の夜。秋の夜ハものさ
ひしさにたゞしかぬる物なれ

こそれにハやうかゝりてさむけに
たゞしかぬる冬の夜のさはなり

哥　夫木　為家
おのまゝりそのあさむしかぬより
おのつ世いろ〳〵里人のあり

俳　こそれハねられぬ寒ハ為ゝ　支考
夜や寒しまるのあらくまるそ涙ふ　一鼠
ゝきおもひにハ外山ふまるまんん　泉志

狂　うゝれめも移ふとくんてそのあハ
あらけきうけてもしたのあれ　道久

詩　冬夜七字對句

起看北斗寒垂地　鴛衾冷
俯听長江流有聲　獸炭消

詩　冬夜五字對句

曉角催寒漏　アカツキノフエノ音ガサムイトケイヲモヨホシ
孤燈旋落花　ヒトツノトモシビガヤモスレバハナヲカトス

国立国会図書館　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961
ガラス使用

△冬暁（ふゆのあかつき）　△さむき朝（俳）暁やぼつけ初る梅のもね　荷兮

（哥）雪玉　おきぬまに八手ね深くなる暁のおもえて袖におもき月かな

（詩）七字對句　詩礎

屋頭木葉飜寒片　茅店月

ヤ子ノウエヘコノハガサムサウニヒラ　カヤブキノヤノ月

墻角梅花吐暗香　板橋霜

カキノアタリニムメノハナガホンノリトニホフ　イタバシヘンモガヲヤウタミタ

△さむ空（俳）さむ空や木ひて見ちらへ梅わらけ　宙存

△さむ（俳）三日月の一張さむしいつく禹　支考

△凍（いてる）　△おぼゆる。凍ハおもほどにハ行らで寒気にこりかたまるなり　こゞゆるハこるとの一訓のことなり

（俳）いもかりの凍さ下女出て厨が　猪柳

△はめたき　枕艸帋につめられ此なれば出しまるまつかれ見ゆるうとき

（哥）玉葉　雪をぬくく我にとまらぬ　その月風やあまし　むすぶつめられ

（俳）はめたきをまるにかける　山林

つめたくも高の長せる　支考

（狂）後令いつめたきものを濃まりけ　あるくもあるくいかるいてくん　梅翁

△雪（ゆれ）　異名　△六花　△六出　故事ゆり　飛瓊。滕　六。玉塵　銀樟。六霙。

雪ハ豊年の瑞といふ事　并雪女其外雪　ようけ委しく天地惑問珍といふ本に出し

（哥）古今集　貫之

あらしかりかりひかけぬを本のるより　花とこんるまくまるふりなる

山家雪　定家

待人のふりくの夜も絶ぬ　新潟の枝にしきれりなり

田家雪　実蔭

待かゝる稲田の菴乃　朝わらけ　外山ばかけてくるまゝ

柏玉　遠山雪

国立国会図書館　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961　ガラス使用

雪の山のこと乃ゆふ

雪五　谷雪

雪のふりしきて谷の戸にる乃ものやさしく

同　川邊雪

雪の上にうつるもつかしは筑摩川

夫木　湖邊雪　爲家

雪ふるやはるれ山も風はやく

ひとしきりのそら雪

風雅　行路雪　なにがし

親くの笑ふ乃をわきてく

分るたよりもまよふ雪哉

夜雪　小舟

雪の戸たゝくそうこえつゝは

うりかふそのひゝうりうそ

夫木　名所雪　爲家

雪ふるまつのたゝずまひもきえ

所もうもれぬるのこゝろを

詞　降る。つもる。かきたて。かきたまて。ちりくる。白妙　初雪十月の條ふ

山ふところ　雪人の參詣なき事。山路なき事。嶺のすがた　阿八　そんどなり。

きゆる。氷のうすらり　風ふき。雪げのうせ。ふるさと八風のたゆるようをよひろう　海邊　はふふきとつりぬ。海士の苫屋の煙る。

たゝり　隱棲。雪をのせる海士の。塩のおもえこゝろぬ。それ　高嶺など白く

くのけしきよむべし　庭上　分いくふ。そこ人のかよき。とくとうみ

木立　木ごのえ。梢ふきそゞ。梅ふまがふ。十ふくのえよ。梢ふきそゞ。松乃ちとせのふ風。梅をいろをわうぬ。ふるふ郎ふ。余所のふるまき

除雪　分ふくふくふぬ。ふうれ　ふもふぬ。ふうたくつる。かきたく。そり。雪ふく。雪ふ。

右のふ要ふをけ、土民おふる

連 朝きよみ雪にうつする物かれ 豊通
世よふるやまの深山のまれ声 紹巴

俳 我雪と知りへは晴しまの上 其角
市人にいそこれらしんまの笠 芭蕉
雪おれは引切り非や朝氣の湯 宗甫
あるふとうんでもまほとまれ物は 徳元
雪うまに浜山ハ夏の仙人 支考
雪ハさえれハ風なりおのこる 蓼太

狂 雪にあるまを帽子にかぶるも
かしらもさぞれ大ひへの山 宗増
雪ドやすらまやらまきぬ白妙ハ
ひとりぬるる天地なりけり 貞徳
ぞろふるぞとそこんの白ハあまど
ぬるぐしたをるおもしろ 貞柳

詩 雪五字對句 同上

天地無塵事 妬舞時飄袖
天モ地モユキガフレバ
コレノチリモナイ
人ノソデニヒルガヘル

江河有篆文 欺梅併壓枝
江ニモ河ニモ一ツ字ヲ書タ
ヤウニツレノガミヘル
梅ハイイロヲ一ツムイテ
エダマデヲオシヲル

拂樹驚梅早 尖峯排玉筍
木ヲハラフテハハヤサキノ
ムメカトオドロキ
トガツタミネハ玉ノタケノ
コヲナラベタヤウニミエ

凝陛類月殘 圓石疊銀盤
フミタンニカタマツテアルノ
ハ月ノノコツテアルノニ似タ
マルイ石ハミロカ子ノタラヒ
ヲカサ子タヤウナ

詩 雪七字對句 詩礎

三千世界銀成色 把長沙
ミチヒタイ中ガシロカ子ノイロ
ユテリ
長フツヒイテアル
イサゴラウヅミ

十二樓頭玉作層 沒樵路
ナニノロウノヤ子ハ玉ヲカサ子ア
ゲタヤウナ
キコリノミチモ
ウヅム

看來天地不知夜 梅花信
カウミレハ天地ノアヒタニ夜トイフ
コトハシラヌテアラフ
ムメノタヨリ

飛入園林總是春 柳絮風
トンデソノハヤンニイレバスベテ春ノ
ハナガサイタヤウナ
ヤナギノワタガ風
テチルヤウナ

雪ノ詩詞

瓊林 玉樹 冷艶 寒光
タマノハヤシト
ミタテタルヽ
玉ノヤヘキト
ミエル
ヒヤカニウツクシ
サムクシテヒカリアリ

呈瑞 散銀盃 花意思 鋪作月
ミヲタキシ
白カニノサカヅキヲマクヤウナ
ハナノコヽロモチ
チニフリシキテ
月トミセル

国立国会図書館 タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961
ガラス使用

詩　雪詞　唐祖詠

終南陰嶺秀積雪浮雲端

終南山ノミネガタカフニユレバツモツタユキモクモノハシニウイニアルヤウナ

林表明霽色城中增暮寒

林ノ上ニハレタルナシキガアキラカナトオモヘバシロノウチニハ日クレノサムサガマサツタ

詩　同　柳宗元

千山鳥飛絶萬徑人踪滅

山ノユキニトリノカヨヒモミヘズイヅクノミチモユキニウモレテニトヲトモナイ

孤舟簑笠翁獨釣寒江雪

ヒトツノフネニニノカサキタ　キナガツニヒトリサムイ　江ノユキゲシキヲオモシロガツテウラ　ツリテヰル

雪日本之故事

香爐峯雪

雪ハふくふりたるゆゑ一條院はしちかく出させをひてかうあるのありさまいかゞゆゑんとおほせられければ御前に在する清少納言ことゞハなくて御簾を巻上たり帝ことの外感じさせをふとうやこれハ次にあるに詩の心を合せたるなり

詩　朗詠集　白樂天

遺愛寺鐘欹枕聽香爐峯雪撥簾看

コノ詩ハ樂天炉山トイフトコロノ山荘ニ居シテ東ノカベニ五首ノ詩ヲダイセラレタルソノウチノ第四ノ詩ナリ　廬山トイフトコロハ遺アイキトイフテラニチカクカウロホウノフモトナリ

俳　捲あるすれ内にも雪の夜　蝦明

雪の山

雪ふる時ハ藏人所の衆大内に參して藤壺に雪の山をつきしこと一条院の時より始て後伏見院永仁のころ迄ハありしとぞ今ハ絶たり枕草帋に曰しきすの千余日のあとに雪いとしうふりたるを御ゆゑに式部丞忠隆にあるりたれバしきね出しくおなしのかたに雪の山作しをかはぬ所にそなるをきれ前のつぼにも作らせたまへり　下略

俳　富士ハ一枝附の雪に付雪の山　霞外

雪の粥

雪のふりたるゆゑ藤原仲文院の御所に參たるに院の御粥おひしめかせて哥よめと仰られたまへバ

哥　白雪のふれるゆゑの白粥を

いとうるはしくふりつもる物ふうみえる

俳 雪やこの月のすゑを梳の粥 東窓

粉雪 はまぐり草おもしろく粉雪 丹波の粉雪といふを雪ハ

よねをつきさゝるゝに似さればいふ

なるへし潘子のいふ所を丹波とそゝ

鳥羽院稚くおはしまして雪のふ

るふかく仰られけると讃岐典侍日記ニ出

俳 山風や雪の粉雪さゝ吹呉郷

梨花として粉雪とそする 兮香

雪唐故事 **柳絮** 謝太傅安トイフ人兒

女ヲ内ニアツメテ文ヲ講

論ス俄ニ雪フルヨツテ兄ノ子朗トイ

ヘルニ向テ曰白雪紛々何ニカ似タル

朗答テ空中ヨリ塩ヲフラスガゴトシ

トイヘリ又兄ノ女ニ向フ答テ曰柳

絮ノ風ニヨツテ起散如シ安モ奇

オノ賞シテ悦フ世説新語ニ出

俳 ふるさとハこれよりつけても恋しかり

雪と紀氏風よしをの柳ふハ素仲

蕭雪 蕭武單于ニ使ス單于ト

ラヘテ北海ノ上ニオク食ニ

ナガラ雪ト毛トヲ嚙

テ数日不ト死遂ニ漢ニ歸ル

放馬 齊国ノ管仲旅中雪フ

カキニアフテ道ヲ失フ其

時老馬ヲ放テ行クニ任セテ隨ヒ

行バ遂ニ道ヲアヤマラズトカヤ

雪花 △六花。天上ニ瑞木アリ雪

ヲアツメテ瑞木ノ花トス

△六の花といふハ。草木の花ハ皆五出

なり雪のミ独テ。六出有と月令廣義ニ出

俳 馬の尾ふるの花ちる山路哉 支考

雪降ハ枝も丸ッ六ッのさくら哉 文洞

ゑばつき雪 木の葉などにつもり

なる雪のさらさらとしてつきやすきをいふ

俳 ねておきね尾をそよそよと雪荷風

雪肌 世間美人を賞する言葉なり

まさごもろともと雪をもいふ

国立国会図書館 タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961

ガラス使用

語なるにバ隨分季とするべしこれらの事うつゝ衣などの例もあり

雪空 ○雪催ひ。雪気 俳 雪ゆゑ月くらの耳に新く一晶

鬢と足とハうハ警するの声 梅五

哥 為相

風といふこゑおれる雪に新ありく月にあるけの声ありきけき

雪聲 しげうに窓などにあたる音をいへり

俳 アれハ頃小裏表ありしの声 嵐雪

詩 雪聲詞

石泉凍合竹無風夜色沉沉萬境空 イシマノイヅミモコホリガハリツメテタケニカゼノオトモセズヨルノケシキガモノシヅカデセケンガヒツソリトシタ 試向靜中閑側耳隔窓撩乱撲春蟲 フトモノシヅカナウチニ耳ヲソバダテ、キケハマドヲヘダテ、ハラ〳〵ト春ノコロムシガヤウジニアタルヤウナオトガスルユヘアケテミタレバユキガフルノデアツタ

雪消 昔ハ雪多くなる時に粉餅并菓物を互に相饋るこれを雪けしといふ是を喰ふて寒をわするといふ心なり 日並記事出

富士雪 富士にハ四時雪ありしへ御傘にハ雜とは又通俗志連哥おくまれ等にハ冬とは此事大に論あり委く補遺に出す

狀 雪中之文

朝來六花呈瑞彌望為一色之瓊瑤來歲之豐可知矣老拙畏寒徒倣衣安閑擁炉唯仰神仙來賞之而已

○書賛ハ寒氣。歳暮の條見合せべし

妙 寒中の雪水を貯へつ移に用ゆれバ一切の熱毒を解を

茉 雪中夜寒手足こゞへぬ法。胡椒を二ツに割ありろくにくいて

国立国会図書館　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961
ガラス使用

こかし紙にて氣のぬけぬまうに包て臍にあてゝよし

霜 朝霜 夕霜 いへど多く曉がこゝろよりおくものなり

(哥) 新古今 [illegible] 慈田

夫木 [illegible] 俊成

同 [illegible] 定家

同 [illegible] 後九条 内大臣

拾遺集 [illegible] 信

柏玉 曙霜

[illegible]

同 朝霜

[illegible]

(詞) [illegible]

(連) [illegible] 宗祇

(俳) [illegible] 支考

(狂) [illegible] 貞徳

[illegible] 貞馬

霜之故事 鄒衍哭 スウエン コクス 鄒衍トイヘル人燕ノ惠王ニツカヘテ忠ヲ

国立国会図書館 タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961
ガラス使用

尺ニス左右ノ人是ヲ妬テ讒言ス主怒テ衍ヲ獄中ニ入ル衍天ヲ仰テ罪ナキ

コンヲ哭ス夏ナレ氏 霜大ニ降ル 淮南子ニ出

鷓鴣畏 霜ヲ畏ルヽモノ之季ハ三ツ四ツ八ニ出ス

鐘聲 唐ノ豊山ト云ル所ノ鐘ハ霜フレバ自ラ鳴ルト 山海經ニ出

霜柱 寒つよくしときハ谷ノ内又陰地の野辺などにもたゞ 土高

〇ゝかり掛けて柱を立るごとくなり

(俳) 霜さへもかゝる柱を幸の神 金波

(哥) 夫木 霜ふかき岩屋にすてるゝ程 [illegible] 光俊

霜花 三ツの花。霜濃く屋上にふれバ皆百花の状あるをいへ

〇三ツの花ハ水の花の轉音ともいふ又雪を六ツの花といふ也 霜を三ツの花と云ふや

(俳) 雪よりも日数ハ多し これの名 冠柳

霜氷 霜の姿氷になりて氷を

霜夜 (俳) 人さへも楷に動かぬ 言水

(哥) 古今 [illegible]

[illegible]

霜 [illegible] 雪に同じ 十月に 公實

(哥) 夫木 [illegible]

氷 厚氷 氷花 氷衣 薄氷 ひ

(異名) 氷面鏡。氷の和訓 [illegible]

むかしハひといつり後にこほりと三字によぶ事ありさりひもかゞみハ氷のそりたる面が鏡のやうに見ゆる故に名づく 氷の花ハ氷を花と見なしたるゝ 氷の衣ハ池川にたるゝ[illegible]

(哥) [illegible]

[illegible]

国立国会図書館 タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961

ガラス使用

續古今　谷氷　為尹

[illegible]

新勅撰　湖辺氷　内大臣

[illegible]

柏玉　葦間氷

[illegible]

夫木　薄氷　小侍従

[illegible]

詞　よとへて[illegible]

入江。山蔭。[illegible]

[illegible]

連　[illegible]

俳　[illegible]　白羽

[illegible]　正秀

[illegible]　嵐雪

[illegible]　其角

注　[illegible]

[illegible]　入安

[illegible]　十慶

詩　氷七字對句　詩礎

寒生玉指紅先透　寒侵玉

光遂金刀翠欲消　冷浮銀

氷ノ故事　狐聽　河水氷ル時狐是ヲ渡此後人モ氷ノ上ヲ行ト　述征記

○本朝信州諏訪湖モ氷厚クシテ人馬氷ノ上ヲ往来ス先ヅ狐来テ渡初ルヲ見テ人モ行キ通フ春氷解ベキ前ニ狐帰ル是ヨリ人モ不渡トイヘリ

国立国会図書館　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961

ガラス使用

△氷聲 氷をさくく声なり氷は
くぶれて氷をさくれくぶき
又舟をさすすとく櫓にてもうつこ
此音をこゑといふ
(文)楊延秀稺子敲氷文曰
稺子金盤照曉氷彩絲穿
取當銀鉦敲成玉磬穿林
響忽作玻瓈碎地聲 コトモガウ ツクシイボ
ンニアケタタノコホリラノセアテラアケテノ五色ノ
糸デクヽリギンノドラノカハリニシテタヽキ玉磬
ノハヤシライヅルヤウナ カトコ サストオモヘバチキニハ
月ノタヽカ地ニオチテクタケルヤウナオトガシタ

△露氷 露結びて霜となるといふ
なぶとく嚴寒の心なるべし

△鐘氷 かねの音のさえて氷るが如
きなり手足の氷ると
いふも手足に寒氣の入て氷るが
ぶとれをいふかねも是におなじし

△氷の轄 氷解るなり 八雲御抄に出
(哥)夫木 為家

あるまもてハ田川にたてる水車
おのくさひうちそくてくなり

冬混雜

此部ハ日令時令草木か
どにいしぶる品をのせる

炭 別名 烏銀 種類 △切炭 △池田
炭 △炭頭 △輪炭 △炭團
右の外種類ハ次に記し今攝州池
田の辺にてやくるの池田炭又切炭
といふく日本諸州の茶人ことに
此ところの炭を用ゆくぬ木にて
やくといへばくぬぎ炭ともいふ
△輪炭 池田炭の大成物を薄く
切たる形車のるに如し故に名づく
△炭頭ハ炭の俵一俵の内に十と十
五と大なるものあるをいふなり
△炭團ハ炭を粉にして丸くなる物

△炭竈 △炭燒 △小野炭。和哥に
よむ炭がまの名所ハ小野
山山城をしほ山同 はくぐ山常陸な
どなりよりて小野炭といふ

国立国会図書館 タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961
ガラス使用

○炭がまハ山のふところを掘(ほり)ひらきて竈(かまど)をつくり薪(たきぎ)を多(おほく)入(いれ)きく炭(すみ)を焼(やく)

(哥)拾遺集 深山木をおほみ雪のふる小野の炭(すみ)の白(しろ)煙(けぶり) 好忠

夫木 ふすぶれる炭やき衣(ころも)ほしわたす人のたのひとのうハ雪

詞花 山ふかみ炭(すみ)やく煙(けぶり)ほそ山ふく風(かぜ)にたえだえぞたつ 師時

新古今 冬ごもり思(おも)ひたえぬる炭(すみ)がまの煙(けぶり)ぞ空(そら)にうすくなりゆく

(詞)とち木。すゝき。ちゝろ虫(むし)。きりぎりす。鹿(しか)の音(ね)。猪(しゝ)。

金葉 炭(すみ)がまに小柴(こしば)山ふかみ雪のまどふ煙(けぶり)ぞたつ 師時

新古今 冬ごもり思(おも)ひたえぬる炭(すみ)がまの煙(けぶり)ぞ空(そら)にうすくなりゆく

○炭(すみ)やくとて山のぼる乳(ち)をよばうと人(ひと)のいふ詞(ことば)をよく乳(ち)はたれ

年八ちゝにたきやけどもよばうとぞいふ

(俳)炭やきの洗(あら)ふ水もおかし 支考

(哥)唐(から)国の山(やま)ぎも炭(すみ)とうり 忠岑

天(あま)ぐもの炭(すみ)ハ世(よ)ゝをやき 秀信

(狂)白妙のよるハ雪とやうりつらむ炭(すみ)やく小野(をの)の里(さと)の家卿

(詩)炭詞 東坡

豈料山中有遺寶 山中ニ豈(あに)ニ料(はかラン)ヤ遺寶(ワスレタルタカラ)ノ有(アラン)ヲ

南陌北隣皆種玉 南陌北隣(ナンパクホクリン)皆(ミナ)種玉(タマヲウエ)

漢王元用金如糞 漢王(カンワウ)元(モト)用(モチヰル)金(コガネ)如糞(フンノゴトシ)

誰識燒殘是精金 誰(タレ)カ識(シラン)燒殘(ヤキノコシ)是精金(コレセイキン)

国立国会図書館　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961

ガラス使用

炭之故事

胡桃炭　唐宋世ニハ炉ノ炭ニ専ラ用フルコトヌルミヲ胡桃ノ形ニ作リ酒ヲアタヽムトカヤ

獣炭　唐ノ牟琦ト云ル人炭ヲ獣ノ形ニ作リ酒ヲアタヽムトカヤ

△製法ハ炭十斤鉄屑十斤合テ搗テ糯米ニテヌリ乾テ用ル時ハ火キエズ

楢　△ヲク火△骨黛炭　ヲクのかくいハ株杭ノ木の根を灰の中ヨウヅミ其上ヨ火をヲケバ自然ニ火ノツク山中ニテ埋火の用ニ成ル哥

おもわぬにうづみ火をおこしけり

(俳)　埋ヲケル百歳の祖父かくいし炭　左東

廻炭　炉中ヨ炭をつむ時古のたゞけ〳〵ものゝ置ル炭をあげ〳〵客人おりしく所ヲ置をこれをいふ

(俳)　二の指のをしなを客ヨおりすゝめ其爵

白炭　△花炭　△枝炭。多くハ薪燭の木をやくゝ灰中ヨ埋みおきバ白くなるゝ枝の形ある曲枝炭ともいふ。河州北の瀧あくゝ

花炭も同所ようゝ出或ハ梅の花もふやれ竹ノ葉ともお存ル名品ありう

(俳)　白炭や身ハうらなれの枝　二柳

賣炭翁　△炭賣人

(俳)　炭賣や翁の汚ル袖をうる其角

(詩)　賣炭翁詞　東坡

積火変深黛　火ニツヨレバニツ名ニヨリ牙角

糟怨怒　牙ヤ角ノ字ハウニヨツテ人ノイヒヨリテイカルヤウニヨエル

炭斗　一名烏府。炭入る器ありふくべ又ハ籠などいろ〳〵こそ

助炭　助炭ハ炭をたもつ事ニ玉て炉のおゝひのことなり

爐　△冊炉裏　△地炉。炉ハ今茶人の用るハ方一尺四寸ニ。山家のもの又寒国のものハ其製大ニ昔堂上ふかりしも其製大ニ〳〵そ

埋火　△炉火。哥ふ炉火の題ハ埋火を詠ニ。又ハ哥ふ訳ハ前ヨ出

(哥)　末木「山松のねくらさへ谷せばみ埋む炭のわくらもろくて世をもふるゝ　俊成

爐火のおこりたるさまをいふ　こゝろふかくぬくもりのよきさま　親玉

詞　きおこす。爐火のこと。炭をも。

爐火のおこるやうにまろく。まるのまゝをおこすをさしていふ。ねぶる　眠ふ　かきおこす　曉ふ　澁ふ。

爐火のおこりにくきをいふ。反のよきをいふ　喜ふ　おりひこづるゝ。ひものの爐火。きえやすきをいふ。うつくしくまろくおこりたるをいふ。

連歌　爐火のいきくゝうるおひてうつくしきをいふ　爐火のおこりにくきをいふ　昌休

うつくしき火のひくゝ扇やまの窓　紹巴

能　爐火の赤きと二人のうつくしき　其角

爐火赤くねうねうとおこりたるをいふ　支考

爐火赤くおこりたるさま　女　許六

詩　炉ノ詞　楊審

天地風霜日夜新　天地ノ間ニ風ガ吹タリシテモカヲダリシテヒルモヨルモイソガシサウナ

地炉穏坐煖如春　地炉ニ穏ニスワツテヰルト煖カナ事ハ春ノヤウナ

筋骨已惕心無用　スヂホネモヒクトシテ轉ベツトシテナニモコヽロガヒカヌカ

人　イヨ〳〵ハヅカシイ思ヒノヤウナトキガクモスルハヅノコヽロヲカリテ書ヲヨム人モアラフ

詩　炉七字對句　詩藪

客來寒夜火爲媒　且呑声　サムイヨニ客ガクレハ炉ノ火ヲナサウニスル

煖酒仍將半栗煨　蚯蚓鳴　サケヲカンニシテ分ケナヒツヽトクリトヨムシテ由ルクトオモフ

塗炉緣　春ハ立ヨリ冬ハ是ヲ用ふ　緣ヲ用ヒ冬ハ是ヲ用ふ

火燵　置火燵　こたつ　ハむかしなし　近世の好こうるべし

俳　俤の猶さへ切るふすま哉　支考

爐塞ぬ猶さへ切るふすま哉　支考

世ごゝろの笑ひ加る巨燵哉　許六

押入の荷こゝろのわんぱうぞ　景州

狂　指掬へ汗ぞかゝらく　楊柳

国立国会図書館　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961

ガラス使用

△火桶（ひおけ）△桐火桶 △火鉢（ひばち）○火鉢を近世の名とす火桶ハ昔よりの名なり今土にて作るを火桶と唱ふれども昔ハ桐もちゐて火桶といひし也

（哥）拾遺「冬なからハ宿にハ火桶を身にそへて しつくろふ人をまつかなつのそや」

（俳）抹子気火桶ふかける枯の簇　茶竜
消やや寄る火桶のわらひけり　柳素

（狂）おいそぬつきのあさふらし桐火桶
わくうたのまくらんそでる　南和

△手爐（しゆろ）俗にいふ手炉なり △懐炉（くわいろ）△手焙（てあぶり）小さき火鉢の事なり

（俳）一役ハたれしも手炉のはなれ　青飛

△湯婆（たんぽ）脚婆。銅（あかゞね）又土にてもつくる湯を入るゝ器なり足を
わたゝめ身もあたゝむ

（哥）挙白集「うきおもひも身にそへてふく ひとりねのまもりし湯婆しと思ふ」

（俳）たくふたれをも足に嫁れし　東白
老の節目を閉たるらんほれ　来山

△衾（ふすま）△敷ふすま。ふすまハ臥具なり寒夜ふ引きてもさえとほるよしきこゆ又厚ふすまなとゝ寒き夜を忘れしといふなり

（哥）「さゆる夜のおもひをつまとやむるらん 風もたゆらぬ麻の小ふすま」　家房
夫木「さえくらし落紅の霜のふすまよりふすまにさえ」　忠房

（詞）△小ふすま △あつぶすま △麻ぶすま △あさて小ふすま 麻のふすま △よるのふすま
△たかけのふすま。雪の衾
いの紙ふすま △古き衾 古き衾ハ哀傷のみちなり

ゆきがうの衾。ねやのふすま。
きぬぬる衾。落葉の衾。ふすまの下に
かうしときく。秋の夜さき衾。いつも衾

（俳）工夫なりたまたま衾の卵　補笠

（詩）衾ノ詞
龍紋（リウモン）巧織（タクミニオル）呉綾（ゴリヤウ）美（ビナリ）鳳彩（ホウサイ）新粧（アラタニヨソホフ）蜀錦（シヨクキン）香（カウ）
龍ノモヤウニ巧ニ織リ呉ノアヤ鳳ノ彩リウツクシクアラタニヨソホウ蜀錦ノカヲリ

ミヨクタツヤウチ ガウキタツヤウチ 燕寢覆時篭翡翠合

歡擁處效鴛鴦 ザシキデ子ルトキ カブレバヒスイトイ

フイトリノモヤウモコモツテヤリ 婦人ライタクトキウチキレハモヤウフヲドリノマネラスルヤウチ

△蒲團 ふとんとハ蒲の穂わた或稲ゑら芦の穂などを入れ

るものなり木綿ハ近世の事とし

(俳) むつかしとてふとんの取けり 芭蕉

(狂) 宮ゝ坂裏のおきへかつぐ西なるを ふとんなるをわかりかゝりし 千竹

△紙衣 △紙衣ふとん △紙衣をなり 老人の着てかろくてよく風

をふせぐ西へ製するなり

(俳) 蓋せし 蓋の主 蓋や紙衣 其角

△頭巾 △丸頭巾 △角ぶきん ○法樂ぶきん 四角に仕立たるを巾を

いひ丸くこしらへたるを帽といふ漆

でぬりたるを冠といふ唐令にもち

くの時服をたまふに冬ハ頭巾一枚

とありこれハ礼服をいふなり

日本よくハ頭巾を着て人に逢

事を無礼とし

(俳) 頭巾とハ税かハ門たり 徳改 支考

老の夕のきりぬるも頭巾ハ 五樓

△足袋 堂上にハ四季とも不召ハ

民間冬の用とし

(種類) ○皮足袋 ○刺足袋 ○木綿足袋

○雲斉 たびなど品ゝあり

(狂) 我門ハあるもあらて革たびや

芦ゐふ ふねの掉もけしたり 若室

△綿 △綿打 △綿操 △延綿 △唐綿

わたのこけを三秋の部綿取の條出

△束綿 △綿つむ △臂綿 ○右いづれも

わたへ作れる形によつて名づく

△綿帽子 婦人の頭巾ハ婦人頭に

いたゞくを礼とし夏ハ

羅を用ひ冬ハ綿を用ゐ

(俳) 猩を女に持せし綿帽子 舊里

(狂) 綿帽子心もの古れ情ならぬ

一小の間乃山のいくつき 與射

国立国会図書館 タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961

ガラス使用

△綿衣 真綿にて衣ぶくんのぬく製る物なり名りと付て冬の下着とは

△水洟 寒氣の節鼻より水乃ぶとれもの出るをいふ

△胼 寒氣の節人の手足にある病人

△皸 ひゞの甚しくて口のあきて切るゝ事をいふ

△寒瘡 冬手足耳などの赤くされるをいふいづれも冬の病なり

(俳)ゆきなれ垢をなりてあるを猶 松子 あり淳やひさに動ふ猫の耳 其角

妙菜 霜やけハ蛎の売身ともに貝を火にうけ其汁のあつきをうけてよし

○胼にハ山蜂の巣の黒やれ飯つぶにて付る。冬瓜の皮又西瓜の皮の干したると胡麻の油にて付るゝ又せんだあらふてもよし猶くじくハ妙菜博物筌といへる本に有

冬艸木

(十)(土)如斯印ゆるハ十月又ハ十一月の季にも用ゆるものこ

△薪 たきゞハ四季ともに伐るものなれど哥にハ冬の題によるり

△胡蘿蔔引 本艸綱目に見時始テ胡地ヨリ来ル根ノ形人参ニ似タリト故に本朝にて名づく

(俳)ゆんちんの冬ハ畑に新田ひめ 一海

(狂)ゆんじんの割りひをあてハるに出てつひにかもふとそなる 貞柳

△葱 △冬葱 △ねぎ △ねぶう ひともし

(古訓)紀 和名抄ニ出たり (一名)芤艸 根ふかく入て喰ふにも根をよしとは色に ねぶう又ねぎなどゝいふ又中空なる色へうりかぐさともいふ又丸く長くしゝ枝なし故に一文字と名づく 三才圖會に出たり

(俳)女にハ嫌ハれてねぎの白髪ハ青祇

(哥)職人冬哥合へ行まぶせて枕もかるきのうりにはまの雪のなれ玉とらん色る月うな

△枯野 艸木とも冬枯たる野をいふさひしき景色をよむなり

(哥)いろくの花色へのへに立出しかもしらうをれよりれ 有家

国立国会図書館 タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961
ガラス使用

草にしなをうれてしかるをもちゐ
いうよすまうのさいしうかん 光俊

(俳) 枯かれてのすゑ比雀の首 支考
枯かれひとりさめはハ皆ちれ 東史

(狂) 冬枯ハさをむさしのひろくと
奥底もれぬさむさなるらん 京景

△朽野 枯野に同じされども今ハ
木艸の枯朽たる野をいふ

(哥) 万葉 ゆくかやの古枝雪を待
ことをしまたれにかんも 赤人

(俳) くさらやもくさしに枯を明の緒 騎雀

△冬木立 冬かれたる枯木のたちを
いへり多くハ十月の季とし

(十)

(俳) 花なむ姿ハさひし冬木立 朝三
冬木立 爺の足なるふもとうな 昆吾
たまくふまたれまふもなり冬木立 素秋

△寒艸 △冬の草。秋よりくれ殘
つもる艸をいふ又冬ながら
霜の下にある草をいふ

(俳) うれくやせまの蕉も冬の艸 昆吾

冬生類

此部ハ三冬にわたる生類をあつむ

△鷹 (古名) くち (和名) かし鳥。なし柴
鳥 藏玉に出 かしこ鳥 篠目に出

種類 △兄鷹 △弟鷹 △鷂鷹 △鷂
たちこもいふ △兄鷂 けしたちの雄 △鴨鷹 かもをとらしたちなり
△雀鷂 小たちなり △雀鵠 ことめたちの雄なり △隼鵠

△煖鳥 (十一) 。鶻ともいふ隼の雄なり此鳥寒
夜にハおのまづ足の姿をうしへ小
鳥をとりくつろこなぐら梢にねるなり翌
朝この鳥をくらゐどしくなるとこれ
ひとに其飛ひ出く方へその日ハやうどと
いつりこれ天性の義なり

△角鷹 たうの大にして○鵰 くまたち
うけきものなり
くし大なり

。鷹のてけハ四ノ三十五丁メ七ノ廿九丁七
ノ五十丁メ等にくりしくたる

(俳) 鷹もやはらぬ別まの煖る 一晶
夜方にあいさしなし そぬくめる 文素

(狂) 死んでしかりとしぬあとぬくめる
いきくねなりしまうへ 貞室

○右の内△このう△はいたう△さしは△ゑつ
ゑ 鷹ハ小鷹也へ秋ともをる 尚七月の条見合へし

国立国会図書館 タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961
ガラス使用

大鷹狩 △鷹狩 △鷹野ぶた

ゐ秋ゝう大鷹をつゐ大鳥をとる。冬ゝうゝれども鷹狩といへどおほゝべく冬ととるゝう

寄 夫木 俊頼

日数ふるきのゝふきにをくも
月つゐのみうせてやまやや 国信

狩そゐし今ゝゝもかゝるかゝる
ふゝそゐしそのまゝれとおもへ 雅経

詞 かゝう。かゝう。かゝうそす。けゝう。そゝふの意。ふのもゝきをいふ。

やゝと尾のたゝ尾のふえのねゝ 仁徳記の歌のまゝ
のゝれの意。なるまゝの意。どゝゝるなり。

そゝとる意。てゝゝくゝもとゝゐ とゝくる山鳥
ゝゝみようれつゝさねをゝ 左のなきさ

とのねをふゝの終ゝ尾のくゝ分ゝゝ
玲。とゝのまる。もゝゝれ終ゝかゝくゝゐ

ゝゝとゝゝゝとぐゝもゝゝをゝゝつゝれのる。
ひくゝる。山ゝゝつゝくゝ立る山のくゝれ

草かゝれるの詞。そゝ。せゝの契。
こゝ。ぬすゝる。かゝゝれ雑。いつ

きのゝゝ 禁本 毎日 とよのゝゝ
かゝゝ 序歌 かゝとゝの小北。北もれ後

鷺ゝ八 狩場のとのゝゝ 泉かゝゝおゝゝの
月 かゝゝのゝゝゝのま 後撰 そのゝとゝゝくゝゝ

雪 夜ゝ狩ゝゝゐをおゝくゝよゝみなせゝ 武八
ゝゝゐるふゝゐもゝゝゝをいゐゝゝのゐゝのゝ

狩場の名所八春日野 文明 河内
其外所ゝゐゐ。河の流の長きハ次ふるゝ

排 大ゝりてゝゝ絶牡。ゝゝ里夜奥其角
深ゝゝゝゝへ成ゝてゝぬくめる 篠光

詩 鷹狩七字對句 詩礎

新豊樹裡行人渡 騎似雲
タカラ人ユキ、ガ三ル人 騎ノリガタノヤウニオホヒ

小北死城邊獵騎遍 帶禽歸
ヒウヘンレウキカヘル オビテカヘル

国立国会図書館　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961

ガラス使用

(詞)鷹ノ詞　無名氏

故鷹制鏃北風迴草盡
平原使馬開　タカノモトヲリ風ニナビキテタダル冬枯ノ野ニ馬ニテ狩スル
臂上角弓如却月
當場意氣射生來　ヒヂニカケタル弓ハ月ノゴトウ　タカニトラセユミニ射ナドスルカリバ　イサマシイモノジヤ

追鳥狩　列卒をもつて鄉を追出してとるなり

狩場に雉　鷹におりてきゝとるなり
木居　たかと止れ木なり

鳥に落艸　落艸。鷹に追れて小鳥の落る所の艸なり落草とむかり西でもたかがりの事にしがひなければ季となる之　漢雄艸二出

力草　たかの鳥をとるとき艸をちらしてつかむといへり

(哥)はしたかの老の立居の老なりて　このむしもなれちらしなれ　行定

教草　鳥ある所をたかにとしへるなり。鷹の鳥を落したるところを落艸といふ其落艸のうへを羽をひいてしつしてるなり

ぬす立　ぬす立鳥。ぬき立鳥　鷹狩に鳥のおそれて艸などにかくまたるがむそうに飛といふ又たかにひいて艸のかげを飛をもいふ

鳥立幕　鳥の立ゐたらひいてこの所へ狩人の出くなり

(哥)新古今ゆかりのハかりにあるに埋まさくらたちもつんへにはかくれて匡房

鷹匠　たかをいかふ人をもてべくたかをとも鷹師ともいふ

列卒繩　せこハせむる子といふことまく追こりものをいふ

鳥叫　それる鷹をよぶといふ　枝折　萩出　又狩人の声にはげくたかを追立るといふ又鳥のさけぶ声を聞て鷹人のたかをよびくるといふ

国立国会図書館　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961
ガラス使用

△鷹犬 △狩杖。鷹ヨリのこれ引連こゆく犬を鷹犬と云

狩杖ハ鷹狩のとき引ゆく犬ハいやしむるためにより杖なり

△千鳥 正字衛と書 異名 いそ千鳥。言葉にて季子に用ひ来ル物ハ奥の詞の條に△印有見合べし。千鳥ハかもめに類して世きれいに似て小さ川ハ海。入江等水辺に在て群をなし沿ひ行くなくゆふ千鳥といふ

(哥) タナれハ佐保の川原の川風に友ちとりしてもちとりなくく 友則

風にやこゝしほうさ紀とこきけハ夕なくちとり立居なくなり 顕仲

柏玉集 月前千鳥

さくりけれハ秋にて月の友ちとりこゝやましくも浦つゝひして

雪玉集 濱千鳥

よりによりけれよいうに友ちとり月もまなもきよさ濱辺に

同 泊千鳥

おくにみる月もなりしなにしやうてなとりあるべきよるのとなり

同 湊千鳥

夜なとさす夕波ちとりこゝいんよとうこへとやみれもなくらん

碧玉 岸千鳥

うしまなきてもさそれなりれなるふねまりきしにみるなくく

(詞) △川みる 川にまくみるなく △村みる 一むれくなくなり △小夜千鳥 よりにみるなくなり △志ハみる なくなり △浦みる △濱みる △湾みる △友千鳥 ゆくなくなり △友なしみる ひとりてみるといふ △世くちどり △夕ちどり △ねるみる。住ちどり。後にみる。浦みる。ひとなり。やちまく。よびかへり。ゆれかへり。をさざるなり。浦つゝひけり。みるとわる。たりみる。たちねなく。ともやくふ。ねがひの到ね。友うづちどり。そねはれ。かくもさぶめずなり。やちまと呼。

雁（かり）　ちどりいと寒（さむ）こひ雪（ゆき）のふれいろまさるよをおもひおくるとおもひをあはれびてこそ妻（つま）こふるなれ。妻こふるなり。妻こふるなり。

旅泊（りょはく）　旅（たび）の泊（とまり）のさびしきようすをいへるの意（こころ）にて旅泊（りょはく）といへり。

波枕（なみまくら）　波（なみ）のうへにねるをいふ。

雁（かり）　雁（かり）は秋（あき）のはじめ来（きた）りて春（はる）のはじめ帰（かへ）るものなれば雁（かり）のなきねの意（こころ）にてよめり。

波（なみ）　雁（かり）は水（みづ）にすむ鳥（とり）にあらざれども雁（かり）の名（な）所（どころ）の名（な）水辺（すいへん）のものなどいへる合（あひ）をとべし。

○海（うみ）　雁（かり）は江湖（こうこ）の水（みづ）のみにゐる時（とき）をいふ。

連（れん）　旅（たび）の空（そら）なる雁（かり）の声（こゑ）を聞（きく）ときは都（みやこ）なる人（ひと）のたよりをぞ待（まつ）

○雁（かり）の面白きをいふ事（こと）の多（おほ）くあるところまゐりて述（のべ）てみるべし。

雁（かり）　ちくさなるなみだもろとや舟（ふね）の板（いた）百舌（もず）春（はる）立（たつ）波（なみ）のおきくちくちくちくちくと鳴（なく）嵐雪

狂（きょう）　ちよくとみちよくと友（とも）ちどり　夜（よる）の間（ま）にふつきえうせる　貞柳

鴛鴦（えんおう）　異名（いみょう）匹鳥（ひきどり）の文禽（ぶんきん）。雄（おす）を鴛（えん）といひ鴦（おう）を鴛（えん）といひ水（みづ）の上（うへ）ふかをくともまた水（みづ）よれる事（こと）をもよろづつづひとまさればちぎり深（ふか）き此鳥（このとり）の情（なさけ）なり

哥（か）　新古今集　経信

ちどりなくよ　ゆくよりふかき　おもふこころをしるしなりけり

金葉集　前斎院六條

ゆくすゑのちぎりはねがはくは　ひとつにおのがもとをしるべに

夫木集　越前

浮（うき）ねする　山田（やまだ）のもるも　ほすあみの　はやくあふこと　ひとりまつ夢（ゆめ）

詞（ことば）　をしのつがひ。ねがひのあやうくしてわかるゝ。お屋（おく）の床（とこ）。をしの村（むれ）る。をし　眠（ねむる）　ねのをし。ながひのをし。をしのくちもふくらめ。つがはねをしのひとりね。をしの毛衣（けごろも）。何（なに）はれもの赤（あか）き合（あひ）をいふ。

連（れん）　冬（ふゆ）ふかくなりゆく空（そら）の初（はつ）まるい　宗祇

雁（かり）　雪（ゆき）ふかくなる夜（よる）の初（はつ）まるい　水屋（みづや）

鴛（えん）　鴦（おう）のいつも一（ひと）つ枕（まくら）をへだてしと　雲市

国立国会図書館　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961
ガラス使用

(枕) ひねもすとの女まのさきらふるせんさくの枕 芝室

(詩) 鴛鴦詞 古師茎

江島濛々烟靄微 綠蕪深處刷毛衣 江中鳥ガモヤクトキリデエルノヲミル ニオシドリガキレイニモゴロニフタモツクロフテ井ル 渡頭驚起一雙去 飛上文君舊錦机 ヘ人ガクレバソコヲオドイメツヽアメオトゞレデトンデユクバサダメテ卓文君トイフヤウナウツクシイ女ノオツテ井ルニシキノ上ヘイテソノニシキノモヤウニナルノデアラフ

(詩) 鴛鴦五字數 同上

文采負奇色 和鳴多好音 夫婦ナキカハスニヨイコヱガ多イ

白頭心共在 交頸意何長 ガヒノアヒダハ六ヒラノ尖ガヘイデ ソレトキハクビヲ人ニカケイデモコロモ心ヲ一ニアルトリヤツモコロモカラスモイトニハル

鴛鴦故事 韓憑魄

大夫韓朋一名憑ト云ヘル人妻甚美ク康王コレヲ奪フ憑怨テ自殺ス妻コレヲ聞テカナシミ戊日王ト臺ノ上ニ上リテ遊ブトキ臺ヨリ落テ死セリ懐中ニ書ヲ以テ憑ト一ツニ葬ラヘトシルセルカド王ユルサズシテ塚ヲナラベテ別々ニ葬シカバ一夜ノ内ニ二ツノ塚ヨリ木ハエテ上ニテ枝ト枝ト相連リ鴛鴦來テ其木ニスム朝暮カナシミ哀啼コレヲ連理ノ枝ト云搜神記ニ出

鴛の衾 夫婦ナラビふた所の衾をひと所にふさねるのふしうる衾をもちゐる。又又をひと鳥の水ふかくして居をひと。又をひと鳥の雌雄翅を交く即ちをもつてとぶをひと鳥の相ともなれるをもつて鴛鴦帳鴛鴦幌などいふて

(雨) それひとぬをこの衾のおれいかもみ代をそめひとつのゆあ・家隆

鴛の巣 深山の方又ハ僧家ニ用ル異高とひと丈ばかり

国立国会図書館　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961
ガラス使用

其形鷲の翅に似たる故名づく
○又反ぬ沓を鴨沓といふなり

鳧（もも）　鴨の字ハ俗字也　種類△真がも
△小鳧（こもも）△こと鴨△黒鴨△豚白（ハトシ）
△あきは△さきかも△沉鳧（ヒヅ）　異名　青羽
鳥　玄々集ニ出タリ○沖津鳥　万葉集ニ出タリ

（奇）拾遺　[illegible]　公任
千載　[illegible]　顕輔
夫木　[illegible]

（詞）[illegible]

（俳）[illegible]　嵐雪
[illegible]　支考

（狂）[illegible]　貞木

鳧故事

王喬舄（ワウキヤウガクツ）　王喬葉縣ノ令トナリ神術アリ毎月朔且縣ヨリ朝ニ至ル其来ルコトノシバ〳〵ナレドモ騎ル所ノ車ヲ見ザレバ密ニ人ニコレヲ窺セケレバ王喬至ルゴトニ二ツノ鳧東南ヨリ来ル即其鳧ノ至ヲウカヾフテ網ヲハリケレバ一雙ノ舄ヲ得タリ則王喬ニ賜フ所ノ舄ナリ

脛短（ハギミジカシ）　鳧の脛短シトイヘドモコレヲ續ガハ則悲　荘子ニ出タリ

水鳥（こゝがとり）　水鳥甚多し。天鵞。鵞。鵜。かハせミ。鷺等之
專哥ふさむハ。をし。かも。ちどり。ふほ鳥などと季ふ成りの前條に出れ

（哥）[illegible]　人丸
[illegible]　忠良

国立国会図書館　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961
ガラス使用

(詞)水あそび。うきまくら。氷のひま。氷のうへ。こやの池。さむけさ起す。さゆる夜

うきね。むれゐる。羽がひの霜。

つらゝの枕。羽風にかる。みぎはよとく。

よそにきゝる。陸に立て起よ。すだく。ゐる

の下やすらふ。[illegible]み

あらい。おの稲ゐる。よせふろく。よろくの色

○右の外よせるかものおんなかへし

(連)[illegible]　宗碩

(俳)[illegible]池の[illegible]　嵐雪

△浮寝鳥　水鳥のうきねして寝るをいふ。うき鳥を雑とす

(哥)[illegible]　隆房

(連)風ふけば[illegible]　宗養

[illegible]　立英

(狂)[illegible]　舊四

△鷦　此鳥巣を作る事巧なるゆへ巧婦と名付く　東雅に出す

△八月 木兎 ○鵂鶹　木兎ともに八月の季ともする委しく八月の條に見べし

△八月 鱈 △塩鱈。俗に大口魚ともいふ　閑白

故に文字雪にしたがふ和字なり

味ハ生よりも塩よし　北海多くこれをつぶん　若狭の口塩なるものハ至て絶品なり　細鱗大魚　頤の下に鬚あり見べし　頭中に白石二ツあり　性寒きよろこぶ　夏月ハ絶てなし　南部　松前辺冬至の日より是をを釣といふ

(俳)[illegible]　璽

(狂)[illegible]　羅人

△雲腸　鱈のわた　(俳)[illegible]　秀川

△蠣　(名)石花。石に生じてつきたる花のごとし　○一説此貝雌雄[illegible]

国立国会図書館　タイトル『月令博物筌 16巻』　請求記号 特1-2961

ガラス使用

汐の泡れ化したるもの藝州廣嶋より出れハ海中に竹垣を立て自ら取付くがおとくなるをとりて又いけおく場所に養ひく諸州にいさくゆへに味も中和を得てよし自然生のものハ大くても味不佳

(俳) まこしてもすゝ[illegible]の坊万籟 [illegible]ひきや我にハ[illegible]ぬ[illegible] 其角

△蠣舟 浪花川岸所々に舟を止めてかき[illegible]商ふ皆廣嶋より来りて他国の者なし冬月来るに同日に来りて越年して又同日に[illegible]

(俳) 蛎舟の[illegible] 利全 [illegible] 友岳

(狂) 蛎[illegible]の[illegible] 道足

△鯨 △鯨突 △鯨舟 △鋟突 [和名] 勇魚 万葉に出 [名] 海鰌。雌を鯢といひ雄を鯨といふ鰌ハ[illegible]の事なるゆへくじらの形を大なるを[illegible]見立るゝ

(俳) 近る[illegible]多鳳 [illegible] 金波

(狂) [illegible] 喜木

△氷魚 △氷魚使 昔ハ宇治川田上川等より此魚を貢物に奉りしとぞこれを氷魚の使といふ委しくハ九ノ四十一丁網代打の条に見るべし

按ふに氷魚和名に[illegible]魚といふ

(俳) [illegible] 東向

[illegible] 野坡

[illegible] 温古

△鯵 [名] サノホリ。形ちさぜに似て小さし 大和本艸にも形ちさぜに似たりと出たり○白魚に似たりといへるハ非之いさゝの形 白魚にあらずといへり

(俳) [illegible] 瓢水 [illegible] 北溟

△網代 △網代木 △網代守 △網代人 ○川岸より木[illegible]て網

国立国会図書館 タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961
ガラス使用

の廣がりたる形にして氷魚のたく
よひこゝれば再び出る事を得ざる
かゝりにもる網のかゝりにもる也へなこ
ころといふ意にてなりしろといふ是をさ
くひ取るものを網代人とも網代守とも
いふ委しくハ九月生類四十一丁ゟ出

(哥)拾遺集　元輔

「月新の田上の川にさよりけるハ
あしろのひをのよるもしへなれ

新古今　慈田

「網代木にいさよふなゝの青ふけく
ひとりやねぬる宇治の橋ひめ

金葉　皇后宮肥後

「氷魚のよる川せにしゆる網代木ハ
ふ川もしらなゝのうれにやあらん

夫木　「みよしのゝ川のなしろにハ
瀬のこゑハうれもつかりなん　貫之

(俳)惠んもるにせ公ハせいて網代なる支考
あられせに網代の氷魚を賞てなさん　芭蕉

(狂)はりくん因果しらるゝや小車れ
あしろの魚のひをハふるとも　貞徳

夜興引　冬の夜山中の獸を狩時大
をしくこれをよこびくとふ

紫漬　紫をふしといふ古言と生紫
を枝葉とも三四尺つゝに切
て川水の浅きところに積事水の面
より少高し左をれハ雜小魚ハ紫の下
に集るこゝにおいて網を四方に張て
紫をさしれハ魚ことくゝなるに入これ
寒気の時にすぎて立春後川水なる
たるになりてハ魚紫の下に集らず
○淀伏見其外所々にあれども是べ
て水の浅き所にくなる事なり

(哥)夫木　「つけしをとろう下にはしえ
のゝおさなるにもをいうなせん　俊頼

竹筍　△筌　魚梁の末にうけ置ち
でのごとくのもの魚梁に
のぶるにうけ入る器に竹にて作る

(俳)なやら見て機嫌のよいハ井筍ハ二又

(哥)万葉　「山川に筌ふせおきてりりあ
へしとしのあらせを我ぬすまひし

国立国会図書館　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961
ガラス使用

潤眼 △十 鰯の種類四く長し眼大なるゆへうるめといふ

(俳) 並路巾括ふ目鏡の潤眼ハ十調 周勅の妻宅へ来るうるめ入れ 二州

(狂) なまひかくとうるめ此時ハ十五文 成にかえてうる目ゆなりなり 貞柳

河豚 △ふぐ △ふぐと汁 (名) 鰒鱙 (異名) 西施乳。河豚ハ豕の味ひに似たるゆへ名づく。物にふれていかり腹ふくるゆへふぐといふ古名ふぐなりの畧なり。毒ある魚之心ある人喰ふへからは西施乳といふハ其腹の和らかなるを美人の乳にたとへたるなり

(狂) 名にしたる孫に嫌もあるものをふくにいのちをかけて喰らん 道乗

妙菜 ○ふぐの妻にはうりたるとしたハつハの葉のしぼり汁を用ゆべし

生海鼠 △海鼠 △金海鼠。とりぞ虎形に似たる故名く

(俳) 海鼠ハ咽ゆる間のそはぶ 止水

海鼠故事 彦火々瓊々杵尊ノ時諸魚皆仕ヘ奉ルヲ申ス海鼠獨リモノイハズコレニヨツテ天ノ鈿賣命細キ小刀ヲ以テ其口ヲサク故ニ今ニオイテ海鼠ノ口拆ク是ナリ云云 日本紀ニ出

海鼠腸 (俳) これからや尻蒸のちりれされハあそ 完中

鮪 ○はつのこ。大なるは王鮪中なるを叔鮪小なるを銘子東国にしはぐろといふ西国にて細と大魚なるゆへに他国に切て賣を大魚の切身といふ初細のはしりを昔賞したるゆへにこれの名といふ今ハ賤物と成て上に用ゆ

(哥) 万葉 鮪つくとあまれもせるいさり火のかにハ出なん我下おりひを

必用 此部にハ三冬の要用れ事ハ集めしるす

養生 冬ハ夜早くいねて朝ハ日れ出るをまちて起るをよしとし

国立国会図書館 タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961
ガラス使用

特1
2961

冬占假　ふゆぜんかなつの寅の日ミづのと卯の日雨ふれバ来春五穀のゆたひ高し又かのとの寅の日ミづのへ巳の日雨ふれバ同あらひたかし

きのへ子に雨ふまゝバ牛羊おゝく死を。つちのと卯の日風あれバ人民大に煩ふ尤風ふきく土烟をたてゝ雲のごとく空にまじりて黄なる色有ハ吉慶なり黒色赤色なるハ火災あり紅紫は吉なり

冬天氣　ふゆてんきゝ　忽らゆたらなるハ雨之巳午の日晴れバ其月雨多し未戌の日曇まゝバ其月雪多し申酉の日晴其月霜多し子亥の日雨ハ其月甚寒之

飲食　此部にハ冬分人力おゝく製したる食物を集む

切干　冬大根又ハ蕪を薄くきりて干こく貯へ常に煮て喰ふ

△十　莖漬　△莖菜。大根の葉をもて塩に漬るを莖漬とかふ

国立国会図書館　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961
ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961

ガラス使用